

比較文化論ドイツ（比較文化論）

1 年次 後学期	授業科目責任者：渡邊 徳明（教養学 ドイツ語）
学習の目標 (GIO)	この授業では主にドイツ文学の作品を中心に用い、愛における精神と肉体の問題について文化的な理解を深めることを目的とする。 歯科では、物質的側面から人間を研究する。しかし、同時に歯科医は医療人として他の職業にもまして人間性が求められる。簡単に言えば、人間の心を理解する資質を求められるということである。人間は物質的存在であるのと同程度に精神的存在である。このような物質と精神の融合あるいは対立は古今東西の文学・哲学において常に主要なテーマであり続けたのであり、今後もあり続けることであろう。 とりわけヨーロッパ文化においては精神と肉体の関係が問題とされてきた。神学的にも哲学的にもこの問題は重要であった。この講義では特に「愛」における精神と肉体の問題について、主にヨーロッパ思想の文脈からアプローチしてみたい。
授業担当者	渡邊徳明（教養学 ドイツ語）
教科書	特に指定しない。
参考図書	適宜、授業内で指示する。
実習器材	特になし。
評価方法 (EV)	定期試験は実施しません。授業の参加状況などによる平常点(60%)、最終レポート(40%)にて評価します。レポートは授業で扱った作品、もしくは担当教員が推薦する授業関連の作品を一つ選択して、それを読んで内容要約と感想を書いてもらう、というものを求めます。
学生への メッセージ オフィスアワー	出席を重視します。文学や歴史についての予備知識は特に求めません。適宜、画像や映像なども取り入れ視覚的・聴覚的にヨーロッパ文化に親んでもらえればと思います。またこの授業を通じて、一冊で良いですから気に入った文学作品を見つけてもらえればと思います。知識の習得よりも、文学作品をどのように鑑賞するか、という方法・態度をみんなで考えてゆく、という授業にしたいと思っています。

日程	授業項目	授業内容・行動目標・学習方略(SBOs)(LS)・準備学習(予習)内容・コアカリキュラム・国家試験出題基準	授業担当者
10月2日(火) 2時間	授業についてのガイダンス	[準備学習項目] 「愛」における精神と肉体との問題について事前資料を読む。 [授業内容] 学習の目標に掲げた「愛」における精神と肉体の関係とは具体的にどのような問題であるのか、ということについて、学生諸君とのディスカッションを交えながら具体的なイメージをふくらませる。	渡邊徳明
10月9日(火) 2時間	愛における物質と精神	[準備学習項目] 古代ギリシアにおける愛についての議論の事前資料を読む。 [授業内容] 物質と精神についての議論は、キリスト教の成立と発展に影響を与えたギリシア哲学に端を発している。そこで「愛」をテーマとしたこの講義でも、導入として最初にプラトンの『饗宴』を扱う。まさに「愛」の観念を真正面から取り上げたもので、ソクラテスらが「愛(エロス)」についてお酒を飲みながら論じ合って行く。その哲学的議論は簡単ではないので、学生諸君には、ギリシアの神々の彫刻や建造物などを見せ、視覚的にギリシア文化の精神性をイメージしてもらう予定である。例えば古代ギリシアでは「エロス」は目に見えない観念ではなく、具体的な人の姿をとった神であり、古代ギリシアの人々はこのような観念を神として彫像化し可視化して親しんでいた。故にこそ一見抽象的な観念をめぐる議論であるかに見える「愛」についての議論も、当時の人々にとっては理解しやすかったのであろう、ということを生徒諸君にもイメージしてもらいたい。	同上

日程	授業項目	授業内容・行動目標・学習方略(SBOs)(LS)・準備学習(予習)内容・コアカリキュラム・国家試験出題基準	授業担当者
10月16日(火) 2時間	神の似姿としての人間 人間性の崇高さ	<p>[準備学習項目] 古代ギリシアにおける神と人間との関係について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] ソフォクレスの『オイディプス王』について紹介する。自らの罪を暴露することになるにも拘らず、真相を究明するために前王殺害事件の下手人を突き止めようとする主人公の姿は、真実を理によって追い求めるギリシア知識人の姿にも重なる。そのような理を求める態度はすでに扱った『饗宴』にも感じられる(時代的にはソフォクレスの後にプラトンが登場するが)。後の中世キリスト教世界とは全く異なる、神と人間との関係の近さをこの作品から感じてもらいたい。そのことは神が定めた運命に対して人間が果敢に挑もうとする姿に表れているのではないかと同時に、人間の行動が神により運命論的に事前に決定されてしまっている中で、敢えてそれに抗おうとする人間の主体性も特筆すべきであろう。</p>	同上
10月23日(火) 2時間	古代ギリシアにおける人体観	<p>[準備学習項目] ヒポクラテスについての事前資料を読む</p> <p>[授業内容] 古代ギリシアの医学者として名高いヒポクラテスの著書にみられる記述から、当時の人体観について考える。ヒポクラテス医学の人体観は中世ヨーロッパの医学に大きな影響を与え、その人体観の基礎となっている。</p>	同上
10月30日(火) 2時間	古代ローマにおける肉欲的な愛	<p>[準備学習項目] 古代ローマにおける男女関係をめぐる世相について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 古代ローマの詩人オウィディウスの『恋愛指南』を扱う。この作品は男女に向けて書かれた恋愛の手引書で、ローマ帝国の初代皇帝アウグストゥスはこの書を不道徳としてオウィディウスを流刑にした。無論、この一冊で古代ローマの恋愛を論じることは不可能だが、ギリシアの文人たちが提示した理想的な愛のイメージとかけ離れていて興味深い。この書に描かれる恋愛像は、徹頭徹尾世俗的で、要するに物質的豊かさを土台として成り立つ。この作品を解説するにあたり、ポンペイの遺跡の写真などを見せて、壁に描かれる男女の官能的な描写などから、ローマ時代の風俗を視覚的にもイメージしてもらおう。帝政ローマ初期の爛熟した物質文化を土台にした男女関係が描かれるが、それは同時に精神的な空虚さを当時の人々に感じさせましたのであり、やがて東方より伝わったキリスト教の精神的世界へと人々がなびいていくことになる。それは次回以降に考察することになる。</p>	同上
11月6日(火) 2時間	中世ヨーロッパにおける身体 中世医学における身体イメージ マクロコスモスとミクロコスモス	<p>[準備学習項目] 中世キリスト教世界における人体のイメージについて事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 12世紀ドイツで活躍した女性の知識人ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの世界観・人間観について紹介したい。現代人の目から見ると彼女の人体観・世界観については科学的と叫ぶ部分もあるが、彼女の思想にみられる身体と世界との一体感は、あるいは我々東洋人にとってはなじみやすいものであるかもしれない。</p>	同上
11月13日(火) 2時間	中世キリスト教世界における愛と死	<p>[準備学習項目] 中世キリスト教世界における純化された愛の世界と古代ギリシア思想の関係について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 古代が終焉し、ヨーロッパが中世を迎えたとき、これら人間の肉体的な特徴が否定され、文学作品の描写からも造形芸術からも、官能描写は消えてゆく。女性のうち賞賛されたのは聖母マリアで、愛(ミンネ)とは手の届かぬ神に対する想いに類似する、手の届かぬ異性への嘆きの声となって発せられる。つまり、神にも比肩し得る理想的崇高さを伴った、純化された愛が12,13世紀には描かれるようになった。その理想的性格は古代ギリシアの思想の影響をも感じさせるものである。やはりここでも、学生諸君には、中世の教会のステンドグラスや彫刻、壁画などの写真を見せられ、とりわけ人間描写の抽象化の傾向を説明する。しかし、この時代の人々が肉体に興味が無かった訳では決して無い、ということも見逃せない。</p>	同上

日程	授業項目	授業内容・行動目標・学習方略(SBOs)(LS)・準備学習(予習)内容・コアカリキュラム・国家試験出題基準	授業担当者
11月20日(火) 2時間	中世キリスト教世界における愛と死	<p>[準備学習項目] 中世ヨーロッパ文学における肉体と精神の間の緊張関係についての事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 前回の授業で見たように、ヨーロッパ中世の愛は、肉体と精神の間の狂おしいまでの緊張関係を常に孕んでいた。肉体を卑しいものとして貶めていた当時のキリスト教の影響下、それに抵触しかねないほどに人間の肉欲や生の感情を表現しようとする文学が登場し、このような文学においては両者の立場の対立により生まれる緊張・道徳的問題意識が作品の質を高めていったともいえる。ドイツ文学におけるそのような例として13世紀初頭に書かれたゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタン』を用いて解説したい。</p>	同上
11月27日(火) 2時間	中世キリスト教世界における愛と死	<p>[準備学習項目] アベラールとエロイズの往復書簡の抜粋を事前資料で読む。</p> <p>[授業内容] 前回の授業で扱ったゴットフリートの『トリスタン』は12世紀フランスで書かれた原典を元としている。ゴットフリート自身がパリにいたという説もあり、この作品をよりよく理解する上で、視点をこの12世紀のパリへと移すことは有益である。今回はアベラールとエロイズの往復書簡の抜粋を読む。中世フランスにおける恋愛の実例に触れ、その内面性の深さと感覚の豊かさに触れることを目指す。</p>	同上
12月4日(火) 2時間	ルネッサンス期における精神と肉体	<p>[準備学習項目] ルネッサンス期の肉体と精神についての人々の認識について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] ギリシャ文化においては神々と人間とが近いところに共存していて、真・善・美を備えた存在として人間の肉体美が賞賛されたが、同時にそれが神の写し身であった。このことは古代ギリシャにおいて神の世界と現世とが近い関係にあったことを意味しよう。そのような新しい関係はやがてキリスト教が普及して終焉を迎え、その後の中世ヨーロッパ世界では一神教の神の絶対的な尊さと人間の存在の絶対的な卑しさが強調された。やがて古代ギリシャにおいて賞賛されていた人間の身体を復権させたのがルネッサンスの文化である。この回では特にイタリア・ルネッサンスの絵画や彫刻の映像を見ながら、人間における精神性と肉体がどのように表現されているかについて考察したい。</p>	同上
12月11日(火) 2時間	近世ヨーロッパ文学における愛と死 バロックの世界	<p>[準備学習項目] バロック期の文化に関する事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 既に扱った中世ヨーロッパの『トリスタン』は宮廷社会においては結ばれることが許されぬ恋人同士を描いており、愛と死は一つの連想の中に結ばれている。二人の愛を妨げるものは物質的な世界における制約であり、必然的にそういった現実世界から逃避して愛を貫こうとするとき、愛は精神の国、すなわち死の世界を目指さざるを得なくなる。そのような意味では16世紀イギリスのシェイクスピアによる『ロミオとジュリエット』もまた同じ系譜上にあると言える。中世文学のように神の存在が常に意識される世界ではなく、かといって後の時代の文学のように人間の内面を第一のテーマとして分析し叙述してゆくのもない。中世的な神の世界と近代的な人間の自我の世界の狭間の時期の作品であり、今日の人間から見ればある種のアンバランスが感じられる。この作品の展開の不自然なまでの速さ、人物の行動の極端さは、そのような時代のアンバランスを背景に置くと理解しやすいのではないか。</p>	同上

日程	授業項目	授業内容・行動目標・学習方略(SBOs)(LS)・準備学習(予習)内容・コアカリキュラム・国家試験出題基準	授業担当者
12月18日(火) 2時間	近代ドイツ文学における愛と死 『若きウェルテルの悩み』	<p>[準備学習項目] 18世紀後半ドイツの社会的・文化的環境について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 以前に扱ったゴットフリートの『トリスタン』や、前回扱ったシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』では、それぞれ宮廷社会における秩序や家同士の間の対立という外的条件によって愛を遂行することが困難となった。このような現実世界の束縛から解放されて愛が成就するのは純粋な精神の世界のみであり、両作品においてそれは死の世界でもある。18世紀後半にゲーテが書いた『若きウェルテルの悩み』においてはそのような厳格な社会的制限が主人公の愛の遂行を困難にしたわけではないが、しかし友人の婚約者への想いがつり、また旧態依然とした貴族制社会の中で才能を思うように発揮できず孤独感を深めやがて死を選択する主人公ウェルテルもまた、物質的な現実世界の壁を乗り越えられず、その束縛の解放を求め精神の国への希求を強め、最後に自ら命を絶つ。その意味ではこの『ウェルテル』を上述の二作品と同系譜に分類することも可能なのではないが。</p>	同上
1月8日(火) 2時間	近現代ドイツ文学における愛と死 『ヴェニスに死す』	<p>[準備学習項目] 19世紀後半から20世紀前半のドイツの社会的・文化的環境について事前資料を読む。</p> <p>[授業内容] 20世紀前半に活躍したドイツのノーベル賞作家トーマス・マンの『ヴェニスに死す』を紹介する。作家アッセンバッハが旅先のヴェニスでポーランド貴族の少年に心を奪われ、彼を追ってゆく。そのころヴェニスにはコレラが蔓延しつつあり、アッセンバッハにも死の危機が近づいているのであった。少年の美に惹かれ、彼は命を落とす。愛が死へと連結していることを寓意的に表現しているものともいえよう。この美を求めた末の死は、この作品では初老の男性の奇矯な行動として描かれると見てよいだろう。しかし彼は完全に主観の世界に浸りこみ、少年を愛し、自らの滑稽さは眼中にない。この主人公の男性に対し作家自身がどのように評価しているのか、ということについて授業で考えてみたい。</p>	同上
1月15日(火) 2時間	日本文学における愛と死 『風立ちぬ』	<p>[準備学習項目] 「風立ちぬ」の抜粋を事前資料で読む。</p> <p>[授業内容] かつて結核が不治の病であった頃、この病に罹った多くの若者が療養生活を強いられた。サナトリウムでの療養生活を描いた作品としてドイツ文学ではトーマス・マンの『魔の山』が有名だが、今回は我が国の文学作品に目を向けてみたい。堀辰雄は昭和初期に活躍した作家であり、『風立ちぬ』は結核によって恋人を失った実際の体験をベースとしているが、堀自身もまた結核に苦しんでいた。そのため人生の後半は軽井沢などの高地で療養し、いわば俗世界から離れた自然の中で死と美の世界を見つめた人である。その美しい文章は一般にも有名であるが、その美的感覚はフランスやドイツの近現代の詩人の影響を強く受けている。作家自身が病身で療養生活を強いられたという外的状況のために、その作品も限られた空間における感覚の交流や追憶といった内面的なものが多く、劇的なストーリー性は見いだせない。にもかかわらず、彼の作品は現代の日本の読者の心にも深い印象を残すであろう。死に行く者の美を謳う感覚は、この講義で紹介した中世ヨーロッパ以降の文学伝統のみならず、むしろ伝統的な日本人の死生観・美的感覚に根ざすものである。故にこそ、戦争中の出征学徒の大部分が彼の作品を愛読したのである。</p>	同上
1月22日(火) 2時間	講義のまとめ	<p>[準備学習項目] 後期授業で配布した資料を読む、疑問点をメモしておく。</p> <p>[授業内容] 前期で扱ったテーマについて振り返り、参加者それぞれが自分なりの感想を抱いていると思うので、それをまとめる作業を行う。それを基に互いにディスカッションする。</p>	同上